

## 外来語に生じる音韻過程 (II)\*

高 橋 涉

### 2.3.1 子 音

前稿でも述べたように、外来語が借入された際に最も問題になるのは、 $L_S$  で存在した音や音節構造が  $L_T$  には存在しない場合である。前稿ではそのうち  $L_S$  に存在して  $L_T$  に存在しない音節構造が日本語の音韻体系に組み込まれる際の様々な変化について記述した。本稿では個々のセグメントの同様の状況における振る舞いを記述することにしよう。

### 2.3.2

まず英語に存在する子音が日本語ではどんな子音に対応するかを概観する。

(17)	$L_S$	$L_T$
a.	両唇閉鎖音	
	/p/	/p/
	/b/	/b/
b.	歯茎閉鎖音	
	/t/	/t/
	/d/	/d/
c.	口蓋歯茎破擦音	
	/tʃ/	/tʃ/
	/dʒ/	/dʒ/
d.	軟口蓋閉鎖音	
	/k/	/k/
	/g/	/g/
e.	唇歯摩擦音	
	/f/	対応音無し
	/v/	対応音無し
f.	歯摩擦音	
	/θ/	対応音無し
	/ð/	対応音無し
g.	歯茎摩擦音	
	/s/	/s/
	/z/	/z/

## h. 口蓋齒茎摩擦音

/ʃ/	/ʃ/
/ʒ/	対応音無し

## i. 鼻音

/m/	/m/
/n/	/n/
/ŋ/	/ŋ/

## j. 側音

/l/	対応音無し
/r/	/r/

## k. 半母音

/w/	/w/
/j/	/j/

## l. 声門摩擦音

/h/	/h/
-----	-----

(17)に列挙した子音のセグメントのうち  $L_S$ ,  $L_T$  双方に同一（ないしは近似）のセグメントが存在するケースでは、煩雑さを避けるため例を省略する<sup>(9)</sup>。

ここで検討しなければならないのは、 $L_S$  には存在するのに  $L_T$  には存在しない場合の6例すなわち /f, v, θ, ð, ʒ, l/ がどのように  $L_T$  の音韻体系の中に組み込まれていくかである。

まず英語の唇齒摩擦音の無声版 /f/ と有声版 /v/ それぞれについて検討しよう。

(18)	$L_S$		$L_T$
a.	fight	>	ɸaito
	fresh	>	ɸureQʃu
	他 多数		
b.	lift	>	riɸuto
	draft	>	doraɸuto
c.	off	>	oɸu
	gragh	>	guraɸu
	他		

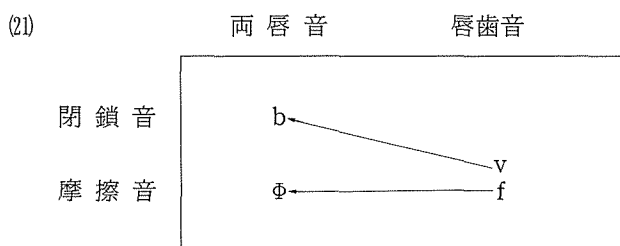
(18)は  $L_S$  において、/f/ が出現する位置別に代表例を挙げたものであるが、すべて調音法と voiceness という二つのパラメータは無変化のままに、唇齒音から両唇音へと調音点のみわずかに変えた音として日本語の中に組み込まれている。

(19)	$L_S$		$L_T$
a.	koffie (=coffee)	>	ko:çi: <江戸>
b.	filet (フランス語)	>	çire <明治>
c.	uniform	>	juniho:mu <大正>
			juniΦo:mu

(19)は(18)の例外にあたるが、(19a.b)はやや受け入れられた時代が古く、(19c)は現在では /Φ/ を持つ形も数多く見いだされる<sup>(10)</sup>。

(20)	$L_S$		$L_T$
a.	violet	>	baioreQto
	value	>	barju:
	他 多数		
b.	anchovy	>	aNtʃobi:
	heavy	>	hebi:
	event	>	ibeNto
c.	live	>	raibu
	eve	>	ibu
	他 多数		

次に(20)は同じく生起する位置別に挙げた有声両唇摩擦音の例である。すべて有声両唇閉鎖音 /b/ に変化している。(19), (20)の変化を図式化すると(21)のような過程の変化となる。



すなわち /f/ は対応する音が  $L_T$  に存在しないため、調音法と voiceness のパラメータを同一に保持したまま調音点をわずかに移動させているのに対し、/v/ は同じ条件で調音法をも変えており voiceness のパラメータのみ  $L_S$  と同一に保持している。これは現代日本語に /Φ/ の有声音 /β/ が欠けているための「妥協」と思われる。

次に英語の歯音摩擦音 /θ, ð/ について検討する。

(22)	L <sub>s</sub>		L <sub>T</sub>
a.	theater	>	ʃiata:
	thank (you)	>	saNkju:
	third	>	sa:do
b.	authority	>	o:soriti:
	esthetic	>	esusetiQku
	他		
c.	bath	>	basu
	booth	>	bu:su
	health	>	herusu
	他 多数		

上記の例は dental fricative の無声音 /θ/ の例であるが、すべて /θ/ > /s/ となっている。すなわちここでも(18)の唇歯摩擦音の場合同様調音点のみ歯音から歯茎音へとわずかに移動させ、それ以外の2つのパラメータ（調音法, voiceness）はL<sub>s</sub>のそれから変化はさせていない<sup>(11)</sup>。

(23)	L <sub>s</sub>		L <sub>T</sub>
a.	the	>	za
	this	>	zisu
			or dzisu
b.	weather	>	weza:
	feather	>	ʔeza:
	他		

上記は(22)の有声版である /ð/ の例である。ここでも /θ/ の場合と同様調音点をわずかに移動させたのみで、あとの二つのパラメータは不変のままである<sup>(12)</sup>。

子音の最後に /ɹ/ と /l/ について述べておこう。/l/ は周知の通り日本語には存在せずこれは統一的に /r/ として現れる。この場合も調音点, voiceness に変化はなく、唯一SPE流の素性で言うなら [lateral] の値が /l/ は [+lateral], /r/ は [-lateral] という部分のみの相違である。例はわずかで足りよう。

(24)	L <sub>s</sub>		L <sub>T</sub>
	life	>	raiʔu
	milk	>	miruku
	full	>	ʔuru
	他 多数		

/ʒ/ は英語においても極めて周辺的な音素で、rouge [ru:ʒ] などフランス語からの借入語に見られるのみである。これは日本語では最後の音は /dʒu/ となるので、有声の口蓋歯茎摩擦音が同じく有声の口蓋歯茎音ではあるが調音法が変わって摩擦音から破擦音に変化している。しかし前述のように元来  $L_s$  においても極めて生起の限られた音素であるので、事実を指摘するのみにとどめ特に考慮しない。

### 2.3.3 子音の変化に関するまとめ

以上前節では外来語（英語）からの借入語が日本語の中に取り入れられたときに示す音変化のうち子音について例を挙げて検討した。/l/, /ʒ/, /v/ のそれぞれの例を除いて、/f/ > /ϕ/, /θ/ > /s/, /ð/ > /z/ はいずれも子音を記述する際に用いられる三つのパラメータのうち voiceness, manner of articulation（調音法）は不変で place of articulation のみわずかに移動させていることがわかった。

この分析にあてはまらない三例については次のことが言える。まず /l/ については、これが /r/ に変化するということは laterality という一つだけの素性の相違に過ぎず、元来調音点、調音法、voiceness に変化はないと考えられる。また /ʒ/ に関しては前述の通りもともとが周辺的な、productivity に欠ける音素である。すると /v/ のみが調音点、調音法とも異なるセグメントに移行したことになる。

このような状況において、前述の三つのパラメータには（少なくとも）日本語化に際しては次のようなパラメータ間のハイアラーキー（階層性）が存在しているように思われる。

(25)

voiceness > manner of articulation > place of articulation

これは次のように解釈される。 $L_s$  に存在する音が  $L_T$  に欠けている場合、まず調音点が相違してもいいから近似の音を捜すこと、次にそれでも  $L_T$  に適当なセグメントが見あたらなかったら、調音点のみならず調音法もやや異なってもいいから近似の音を捜すこと。ただし voiceness に関しては必ず  $L_s$  と  $L_T$  は同一であることが要求される。換言すれば(25)のスケールにおいて左側ほど変化を受けにくいことになる。我々の検討した例はこの(25)のハイアラーキーを守っていると思われる<sup>(13)</sup>。

### 2.4.1 母音

セグメンタルな変化の最後として母音が  $L_s$  から  $L_T$  に借入される際に見せる質的ならびに量的変化について検討する。外来語に含まれる母音が日本語の音韻体系の中に組み込まれる際に受ける様々な過程については前稿で言及した Lovins(1975) に詳しいので本稿ではその概略を本節で触れるのみにして次節では、彼女が詳しくは言及していない英語の弱化母音 (= /ə/) の日本語での振る舞いについて詳細に検討することにする。

(26)	L <sub>s</sub>		L <sub>T</sub>
	a. /æ/		
	bat	>	baQto
	bag	>	baQGu
	他 多数		
	and (hit <i>and</i> run)	>	eNdo
	b. /ʌ/		
	love	>	rabu
	lunch	>	raNtʃi
	c. /ɔ/		
	dog	>	doQGu
	pause(/ɔ:/)	>	po:zu
	d. 二重母音の長母音化ないし短音化		
	maid (/ei/)	>	me:do
	blazer (/ei/)	>	bureza:
	baby (/ei/)	>	bebi:
	home (/ou/)	>	ho:mu
	hole (/ou/)	>	horu
	e. 語末の lowering		
	brandy	>	buraNde:
	money	>	mane:
	alley	>	are:
	curry	>	kare:
	hockey	>	hoQke:

(26a) は日本語に存在しない /æ/ が多くの場合 /a/ に変わることを示している。ただし *hit and run* (野球用語) の *and* は例外的に /e/ に変わっている。(26b) は同じく L<sub>T</sub> に存在しない /ʌ/ が /a/ に変わる例, (26c) は /ɔ/ が /o/ に変化した例である。これらすべて特に問題のある音過程とは考えられない。

(26d) は L<sub>s</sub> における二重母音が長母音化あるいは短音化を引き起こすケースである。上記以外の二重母音 (/oi/, /ai/, /au/) ではこの過程は見られない<sup>(14)</sup>。

(26e) は Lovins (*ibid.*) も指摘している語末の /i:/ が日本語の中では, /e:/ に一音低下する現象である。この事実は別の機会に詳しく論じることとして, 現象の指摘のみにとどめておく。

#### 2.4.3 /ə/ について

英語の母音の日本語音韻体系への組み込まれ方については前述の通り概観するにとどめた

が、本節では英語の弱化母音（弱音節で弱く発音される母音）の一つである schwa(=/ə/)の行動を詳しく検討することにする。(27)の各例を見よう。

(27)	L <sub>s</sub>		L <sub>T</sub>
a.	baroque	>	baroQku
	manipulator	>	manipjure:ta:
	gentleman	>	d3eNtorumaN
b.	barrel	>	bareru
	Babel	>	baberu
	angel	>	eNd3eru
	agent	>	e:d3eNto
	intelligent	>	iNterid3eNto
c.	capacity	>	kjapaʃiti
	reality	>	riariti:
	personality	>	pa:sonariti:
	quality	>	kuoriti:
d.	professional	>	puroΦeQʃonaru
	conveyor	>	koNbea:
	mandolin	>	maNdoriN
	agitation	>	ad3ite:ʃoN
	Bristol	>	burisutoru
	period	>	piriodo
e.	beautiful	>	bjutiΦuru
	powerful	>	pawaΦuru
	uranium	>	uraniumu
	Bacchus	>	baQkasu
	focus	>	Φo:kasu
	bonus	>	bo:nasu

(27)の各例の表記法は他の場合と同様 L<sub>s</sub> は spelling, L<sub>T</sub> の方は日本語の発音表記としているが、この(27)のみ L<sub>s</sub> の spelling に含まれるゴチック文字は当該の母音の音価が /ə/ であることを示しており、また L<sub>T</sub> の発音表記に生じるゴチックは前者の /ə/ が日本語に入った時の音価を強調するために行った便宜上の措置である。

(27)のそれぞれを検討して言えることは、L<sub>s</sub> の /ə/ は L<sub>T</sub> の持つ五母音すべてに変化するということである。そして日本語の五母音のどの一つに対応するかは純粋な音韻論上の条件付けによるというよりむしろ L<sub>s</sub> の /ə/ の部分が持つ spelling によって決定されていると言わざるをえない。例えば L<sub>s</sub> の /ə/ に対応する部分が “a” という綴字の場合は L<sub>T</sub> では

/a/ と発音され、“e” の時は /e/ と spelling pronunciation (綴字発音) されていることは明白である。すると(27)に挙げた  $L_S$  の /ə/ の  $L_T$  での具現化は日本語話者が  $L_S$  でそれに対応する単語のつづりを知っているからこそ生じたものと考えられる<sup>(15)</sup>。

### 3. 結 語

本稿は前稿に引き続き、日本語に借入された外来語（特に英語）が日本語音韻体系の中でどのような行動を示すかを検討した。全体を通してのまとめをする前に、前節2.4.3で検討した spelling pronunciation の現象に関連して  $L_T$  話者の  $L_S$  への習熟の度合いの時代的变化について一言言及しておこう。(28)に挙げる例を見よう。

(28)	$L_S$		$L_T$
a.	pudding	>	puriN <明治>
	jug	>	dʒoQki <明治>
	galley	>	gera (ゲラ刷り) <明治>
	(sewing) machine	>	miʃiN <江戸>
	waste	>	uesu <昭和>
	American	>	merikeN <江戸>
	jelly	>	zeri: <明治>
b.	diamant (オランダ語)	>	gijamaN <江戸>
	Rossiya (ロシア語)	>	oroʃa (ロシア) <江戸>
	meias (ポルトガル語)	>	merijasus <江戸>
c.	jitterbug	>	dʒiruba <現代>

これらの変化はコンサイス外来語辞典（3，4版とも）が「邦転」と称する現象である。すなわち、「原語の発音から大幅になまって日本語に定着した語」と定義されている（同書「使用上の注意」の項参照）。(28a)は我々が検討してきた英語からの例であり、(28b)はそれぞれ当該の箇所記した言語からの借入である。これら邦転の例は概して江戸、明治から昭和20年ころまでに日本語の中に入ってきた語に限られる<sup>(16)</sup>。そしてこれらの語に生じている音過程は我々が検討してきたそれとは大きくかけ離れたもので、これらを音韻論の枠組みの中で説明しようとしてもあまりにも特異なものばかりである。従ってこれらをも同時に説明するような規則を見つけるよりは、邦転は別個に論じた方が好ましい結果が得られると思われる<sup>(17)</sup>。

これら邦転語と我々が前稿、ならびに本稿で扱った様々な過程との本質的な差とは、邦転語は  $L_T$  の話者がほとんどといっていいほど、 $L_S$  の音韻論的知識を持ち合わせていないとき生じたであろうということになる。すなわち我々は(28)のような語が示す現象に対して音声学的、音韻論的解釈を加えることはせず、むしろ現代のようにある程度の英語（ならびに他の外国語）の知識を持った日本語話者が外来語をどのように処理するかを論じたことになる。



さらに言えば、現在の日本語話者は社会の一層の国際化や高等教育の普及などによって極めて外国語（特に英語）の音に触れる機会が多く、一部では本来の日本語の音韻体系を崩すほどの状況に至っている。例えば註(9)で若干触れた  $L_s$  で /ti/ が  $L_T$  で /tʃi/ になる、あるいは同じく /si/ が /ʃi/ になるという過程も日本語話者が英語の音韻体系に熟知するにつれて現在では非常にしばしば従来 /tʃi:mu/ と発音された語が /ti:mu/ と原音に近く（あるいはほぼ同一に）発音されるのを聞く。また若年層においては日本語の「サ行」「ダ行」が本来の /sa, ʃi, su, se, so/, /da, dʒi, (zu), de, do/ でなくそれぞれ /sa, si, su, se, so/, /da, di, du, de, do/ と発音する者も多いという。

このような意味で借入語音韻論は常に純粋な音韻論、音声学的考察とともに言語学外の様々な要因も考慮されなくてはならない。ただし、我々が二稿にわたって論じた現象はほぼ音韻論の枠組みに拠ったものであり、また前稿での音節構造に生じる外来語の音過程にせよ、本稿で扱った分節音に生じる音過程にせよいずれも  $L_T$  の音韻構造にいかにも過不足なく  $L_s$  の音韻構造を適合させるかという命題を外来語音韻過程は実行していることが確認されたと考えられる<sup>(18)</sup>。

## 註

\* 本稿は拙稿「外来語に通じる音韻過程 (I)」(=高橋 (1991)) の続稿である。章、註、データのナンバリングは、前稿に引き続いた番号とし、また便宜上、末尾の参考文献には前稿で用いた文献も含めている。

(9) たとえば  $L_s$  で /s/ が /ʃ/ になる場合や  $L_s$  の /t/ が /tʃi/ になるのは母音 /i/ の前である。ただし3節を参照のこと。

(10) コンサイス外来語辞典 (3版ならびに4版) によると、koffie はオランダ語から17世紀 (江戸時代) に日本語の中に借入されたものであり、「ヒレ」は明治時代にフランス語から借入されたものであるという。/f/ > /ç/ の変化はいずれにせよ少数の語に見られる周辺的な変化である。

(11) *theme* (/θi:m/ > /tema/), *Corinth* (/kɔrinθ/ > /korinto/) に見られるように /θ/ > /t/ という変化を示す例が存在する。しかしこれらの例はそれぞれドイツ語、ギリシャ語からの借入であってこの変化は我々が検討しているものとはカテゴリーが異なるのでここでは考慮しないことにする。(もともと  $L_s$  の段階でこれらは /t/ であったものである。)

(12) 研究社新英和中辞典 (第5版・電子ブック版) によって語末に /ð/ が現れる語を検索したがこの条件を満たす全24語の中で日本語に借入されている語は見あたらなかった。ただしたとえば *teethe* (/ti:ð/) が仮に日本語に借入されたとしたら、語末は /zu/ と変化することは容易に想像できる。

(13) ただし下記のうち a. のような明らかな例外が(25)には存在する。

$L_s$		$L_T$
a. tigers	>	taiga:su
head scissors	>	heQdo ʃiza:su
rompers	>	roNpa:su
cosmos	>	kosumosu
cosmopolitan	>	kosumoporitaN
他		

b.	leggers	>	rega:zu
	body scissors	>	bodi:ʃiza:zu
	fighters	>	ɸaita:zu
	他		

a. に挙げた例は本来 /z/ であるべきセグメントが無声の /s/ に変わってしまっているものである。ただし b. に挙げた語のように L<sub>s</sub> の有声性を L<sub>T</sub> でも保持している語も存在する。さらに *cosmos*, *cosmopolitan* の二例を除き、このような例外は語末の複数語尾の部分に限られているうえ、alveolar fricative 以外ではこの例外は生じていないように思われる。ここでは単に例外として指摘するにとどめる。

- (14) ただし筆者の個人語のレベルに限られるとも考えられるが *foul* (スポーツ用語), *owl* はそれぞれ /ɸa:ru/ /o:ru/ と L<sub>s</sub> と /au/ の長音化が起こっている。
- (15) (27e)の最後の三例は上述の spelling pronunciation の例外となる。ただし、この三例はどれも英語にとっても外来語であるという特殊なステータスを共有している。
- (16) コンサイス外来語辞典は借入年代の区分を昭和20年までを〈昭和〉, 21年以降を〈現代〉としているので、この踊りの名称の邦転は現代と区分されているが、実際は第二次大戦中に流行し、日本には大戦直後に借入されたものである。
- (17) 例えば「オロシヤ」は原語の 'Rossiya' の語頭の /r/ が極めて強く発音されるのを聞いて、その前に /o/ があると聞き誤ったものである (同辞典の説明より) など、それぞれに音声学的解釈が可能な場合もあるが、他の単語の借入にも同じことが言えるほどに生産性の高い規則とはならないという意味である。
- (18) 本稿を執筆するにあたっては、下記参考文献中に記した電子ブック版の辞書類が極めて有用であった。携帯の際の簡便さもさることながら、従来の形態の辞書類ではまったく不可能な様々な検索 (例えば語義に A, B, C という単語を含む見出し語をすべてリストアップする、あるいは語尾の音連鎖から検索するなど) が極めて容易にできるためである。ただし現在 (1991年8月) のところこの電子ブックを読めるハードウェアは SONY の電子ブックプレーヤー (DD-1) に限られているが、これは完成の域にはほど遠いものである。液晶画面の見にくさや、ゴム製のキーの押しにくさなどは改善の余地がある。また検索条件によっては同一の項目を重複してリストアップするなどのバグも見られた。このような CD-ROM 版の書籍の扱い方は菱川 (1990) に詳しい。

## 参 考 文 献

- Hyman, Larry M. 1975. *Phonology: theory and analysis*. New York: Holt Rinehart & Winston.
- Katamba, Francis. 1989. *An introduction to phonology*. London: Longman.
- Lehnert, Martin. 1971. *Reverse dictionary of present-day English*. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.
- Lovins, Julie B. 1975. *Loanwords and the phonological structure of Japanese*. University of Chicago Ph. D. dissertation. Reproduced by Indiana Univ. Linguistics Club.
- 石野博史 1977. 「外来語の問題」岩波講座「日本語」第3巻 199-299頁 東京: 岩波書店
- 大塚高信 他 (編) 1968. *固有名詞英語発音辞典* 東京: 三省堂
- 寛 寿雄 1971. *音韻論II 英語学大系第2巻* 東京: 大修館書店
- 北原保雄 (編) 1990. *日本語逆引き辞典* 東京: 大修館書店
- 小稻義男 他 (編) 1990. *新英和・和英中辞典* 電子ブック版 東京: 研究社
- 小西友七 他 (編) 1988. *ジーニアス英和辞典* 東京: 大修館書店

- 三省堂編修所 1979. コンサイス外来語辞典 第3版 東京：三省堂  
———. 1990. コンサイス外来語辞典 第4版 電子ブック版 東京：三省堂  
新村 出(編) 1990. 広辞苑 電子ブック版 東京：岩波書店  
高橋 渉 1991. 「外来語に生じる音韻過程 (I)」信州大学教育学部紀要第73号 191-201頁  
竹林 滋 1979. 「外来語発音の英語化」英語青年 125巻 17-19頁  
菱川英一 1990. CD-ROMの冒険—「電子広辞苑」にみるCD-ROM 東京：翔泳社  
(1991年8月30日 受理)